

# 垂水史談会報

第47号  
2022(令和4)年  
9月発行

## 【報告】

### 「戦争のあったところのことを知ろう」展

今年は太平洋戦争が終結してから七十七年です。世界戦争がもたらした惨禍は今も人々の心と体に消えない傷として残っています。それにもかかわらず、今年の二月二四日のロシアによるウクライナへの侵略の戦乱は今も終息する兆しを見出していません。今年も八月の1か月間、垂水市立図書館で「戦争のあったところのことを知ろう」展を開催しました。一人



一人が歴史に向き合い、「戦争」を考えるきっかけにしてほしいものです。

### 島津家墓地などをボランティア清掃

八月七日(日)、垂水史談会と垂水市文化協会(西尾佐代子会長)の約二〇名は今年も早朝六時から約一時間にわたり垂水島津家墓所、第六垂水丸遭難碑付近、そして殿様水周辺の清掃ボランティアを行いました。島津家墓所に集合した後、三グループに分かれて清掃活動を行いました。



垂水島津家墓所はもと曹洞宗の心翁寺の跡で、おとし国の文化財指定を受けた垂水島津家代々の当主が眠る場所です。第六垂水丸遭難碑は太平洋戦争中に起こった転覆事故の五四〇名の犠牲者の慰霊碑、そして殿様

水は山城の垂水城の下から今もこんこんと山水が湧き出る場所

で、「垂水(垂るる水)」の語源とも伝えられ



るところです。この三か所は垂水の史跡を訪れる方々や、垂水中央中学



校、垂水高校の生徒たちが文化財巡りで立ち寄る場所でもあり、垂水を発信する重要なポイントです。お盆の前にボランティア清掃ですっかりきれいになりました。

## 【研究ノート】

### キヌサヤエンドウの栽培沿革

新原清実

『広報たるみず』七月号で、キヌサヤエンドウ栽培普及で功績のあった「末田浅一」について記事が掲載された。ここでは、普及していった当時のことを祖母の下瀬弘子による話などをもとに掘り下げていきたい。

キヌサヤエンドウが栽培される以前は、葉タバコが多くの農家で栽培されていたが、タバコの生産には大きな障害があった。一つは、壊滅的な被害をもたらした病気の発生である。昭和三十(一九五五)年に、モザイク病が三十町にわたり発生したと記録がある。



(昭和三十年六月 垂水町報)。東京ドームが約四・七町の広さなので三十町の被害がいかに広範囲であったかがわかるだろう。確認できた広さだけで三十町なので、被害はもっと大きかったと考えられる。タバコモザイク病は伝染力が極めて強く、接触する葉や管理作業に用いた器具や触った手などを介して、次々と感染するのである。そして感染した苗は、葉に奇形が生じ、生育が停滞、葉にえそ班を生じ腐敗していく。また、病原ウイルスは耐性が極めて強く、一度感染が広がってしまうと手に負えないので、収入は見込めない。

そしてもう一つが、桜島の降灰による葉の品質低下である。当時は、桜島の噴火が活発であり、その被害の大きさを物語る記事が、昭和四十八(一九七三)年『市報たるみず』四月号に記されている。四月十、十六日に衆参両院の各党代表からなる桜島降灰被害調査団が二班にわかれて本市の現地を調査した。衆議院は桜島口で参議院は脇登の旧道にそれぞれテントを設営し、資料や標本をもとに被害状況の説明を受けた。両議院も想像以上の被害に驚きの色を示していたようだ。この時、市がまとめた農作物の被害は二億九千万円とある。市の住民代表の下瀬松男(弘子の父で、垂水町農協常任理事、垂水市森林組合理事、市議・産業委員会委員長を歴任)は、「自然現象とはいえ、特別立法などならんかの救済処置を講じてもらわなくては、死活問題にかかわる」と訴えた。火山灰で汚れたタバコの葉を、近くの川で一枚一枚洗って出荷するのだが、タバコのベタバタとした葉に付着した火山灰はなかなか落ちない。刷毛で綺麗に落と



そうとも試みるが、火山灰の付着跡は完全には取り除けなかったようで、品質の低さからいい値が付かなかった。

そこで、タバコに代わりキヌサヤエンドウの栽培を始めたのである。

当時は、栽培する人数も少なく、試行錯誤の繰り返しだったという。最初は支柱に竹は用いず、伸びた蔓は横に倒していたそう。ハサミで一つ一つ収穫し、片面取ったら蔓を反対側に倒し、また収穫していく。収穫した莢(さや)に付いている花を取り除いて木箱にいれ、中俣海岸から出港する園田丸や中俣丸で鹿児島市の競市に送っていたそう。園田丸は現在、園田陸運として日本の流通を支えている)出荷が終った空の木箱は、垂水帰船の船に乗せてもらい後日受け取っていた。

最初は、何も支えがない栽培方法だったが、次第に竹で固定するようになる。細くて長い枝のない竹を輝北などの竹売りから買い、その竹を必要な長さで切り使用した。そして現在は、ネットを使用するなどして、蔓の上に伸ばして作業効率も良くなった。



### 有村一同祖先歴代之總塔

—鹿児島市有村共同墓地(桜島)—

【高さ73、5cm×正面横幅25、8cm×側面横幅26、0cm】



桜島の有村集落の北、共同墓地の一隅に建てられた供養塔である。大正三(一九一四)年一月十二日の桜島大爆発によって、集落や墓域が埋没したことが刻まれている。

【転写】  
(正面)

### 有村一同祖先歴代之總塔

(左側面)

大正三乙卯年一月十有二日櫻島大爆発  
吐岩石吹灰土噴火猛烈山岳鳴動地軸將  
啐人畜死傷実曠古之大變事也村落全滅  
不存舊態墓地埋没不辨彼此痛又歎矣茲  
共同建碑石為舉村全戸祖先歴代之總塔

### 于時大正五年十二月〇日也

\*〇は刻字なし

(背面)(右面)

—刻字なし—

【読み下し】

(左側面)

大正三乙卯の年一月十有二日、桜島大爆発して岩石を吐き灰土を吹く。噴火猛烈に、山岳は鳴動し、地軸は將に啐かんとす。人畜の死傷すること、実に曠古の大變事なり。村落は全滅して旧態を存せず、墓地は埋没して彼此を弁せず。痛又た嘆。茲に共同して碑石を建て、挙村全戸の祖先歴代之總塔と為す。時に大正五年十二月〇日なり。

【口語訳】

大正三年一月十二日、桜島が大爆発して熔岩を噴出し、火山灰を噴きだした。噴火が猛烈なため、桜島の山体は鳴動し、地軸はまさに驚くようであった。大爆発によって人々や牛馬などの家畜が死傷したのは、実に未曾有の大災害であった。そのため、有村集落は全滅してもとの形を留めず、墓地は熔岩や火山灰のために埋没して、どれがどれか判らなくなったのである。痛嘆の極みであることよ。そこで集落民は共同して碑石を建て、有村集落全戸の祖先歴代之總塔とするものである。時に大正五年十二月〇日。

【注】

○大正三年乙卯・一九一四年。乙卯は誤り、甲寅が正しい。  
○十有二日・十二日。「有」はまた、さらにの意。○啐・おどろく。または碎(くだける)の誤か。○曠古・前例のないこと。未曾有。○大變事・非常な異変。噴火の大災害のこと。  
○埋没・「理」は「埋」の誤か。埋没として読み下した。○大正五年・一九一六年

【垂水市史料集(一)】より

### 西南之役 私学校生徒の従軍譚 ③

—立山健氏への聞き書き—

(山口栄之 筆記)

熊本城に懸かる

その晩の十時頃、自分は番兵に出ていたが、今からすぐ出発ということそのまま歩いて行った。途中、宇土でちよつと休んで翌十日(二十二日)払暁、川尻に着いた。ここで今まで携帯していた荷物の内、戦いに不要な物や外套などを人家に頼んで置いて、それから駆足で驀進と熊本城へと馳せ向かった。

熊本は三日前から市中の家を鎮台が焼き払いつつあったそう。今はその煙でただ濛々漠々として城楼どころか何も見ゆるものは無かったが、ちよつと安政橋の上に来かかった時、大砲を打ちかけられた。その音で初めて彼の方角に城があるのだという見当がついた。それをこちらからは小銃で応戦するのであった。愈々本舞台となった訳である。

それからというものの、ただ殷々轟々、空中が鳴り渡っていた。そして負傷者が追々出来てくるのであった。そこでこれはどうしても前方に進んで、彼の城壁の真下に行つて、その掩蓋(おおい)の下に安全を図るが第一との事で、皆々無二無三に突進していった。しかるに行けば行くほど血塗れになって後退する負傷者や、道に横たわる吾が軍の死骸が次第に多くなることに

驚いた。そこでちよつと躊躇したけれどもやはり先導に随つて進み、漸く例の掩蓋下に達した。なるほどこれなら軒下に雨を凌ぐと同じである。城兵もまさか自家の軒下に敵が避難して来ようとは思ひ設けぬことであつたらう。すべてこれらは熊本隊の嚮導（みちびき）によるものであつた。

—以下次号—